

遙かなるルネサンス 天正遣欧少年使節がたどったイタリア

東京富士美術館（八王子） 2017.09.21～12.03

「天正遣欧少年使節」は、イタリア人のイエズス会巡察師「ヴァリニャーノ」が、日本人自身の中からヨーロッパ文明の語り部となる人物を育成する必要があると考え、1582年2月20日に4人の少年たちを長崎港から送り出した。

一行は、イタリア・フィレンツェ、バニャイア、カプラローナなどを經由してローマに至り、教皇に謁見するという旅の大きな目的を達成して帰国した。

本展は、彼らの足跡をたどりながら訪れたイタリア各地の都市の美術・工芸品を紹介し、ルネサンスの中心「フィレンツェ」からはメディチ家の人々が描いた絵画や、大公の工房で作られた工芸品を紹介している。さらに、バニャイア：「狩猟の様子を描いたタブスリー」、ローマ：「教皇グレゴリウス13世の肖像」「使節訪問記念メダル」、ペーザロ：「物語の描かれた美しい陶器」、ヴェネツィア：「ガラス工芸」「ヴェネツィア派の絵画」などと、当時それぞれの都市で花開いた特色ある作品が展示されている。



「ブロンズイーノ」 《ピア・デ・メディチの肖像》（1542年頃） 左

メディチ家の宮廷画家の可憐な少女の肖像画作品で、当時の他の作品が人物の背景にはほとんど褐色や暗い色彩が使われているのに反して、“深みのある魅力的なラピスラズリの青色が背景に使われている”。これは、画伯が特別な青色の色彩で少女の特質を表現しようとしたものであるとされている。

「ドメニコ・ティントレット」 《伊東マンションの肖像》（1585年頃） 右

2014年3月にミラノの学術誌で紹介された、当時の少年使節の姿を描いた作品は、近年奇跡的に発見された優れた芸術品として注目されている。

4世紀も前に彼らが経験した国際交流の旅路を追体験して、その当時、彼らが各地訪問の先で目にした「ルネサンス期のイタリア美術の粋」を楽しめる。